

# 決してひとりでは ありません

またけがをしたときにだれも助けてくれる人がいなかったら、  
イーサンはどうなるのでしょうか？



もえるようにいただきます。いたくてたまりません！  
「助けて！」イーサンは大声を上げました。なみだがポロポロとこぼれました。子供たちや先生たちがかけつけました。

「どうした？」先生が聞いてきます。  
「足が折れました！」  
イーサンが骨折したのは、これが初めてではありません。2度や3度でもないのです。イーサンはほねがもろくなる病気で、ほねが折れやすくなっています。カーブで足をふみ外したり、だれかにぶつかったりするような小さなことでも、ほねが折れることがあるのです。

「お医者さんに連れて行ってもらうために、親に電話するからね」と先生は言いました。「大丈夫だよ。」  
イーサンは、助けてくれる人がいて良かったと思いました。足はまだとても痛みましたが、大丈夫だと思いました。  
お母さんとお父さんが学校に来て、イーサンを医者につれて行きました。イーサンは緑色のギプスをはめて家に帰り、休みました。  
足の骨折のために、イーサンはベッドで長い間ねていなければなりません。読む本はたくさんありました。時々友達に来て、一緒にゲームをしました。それでも、イーサンはたいくつでした。

あるばん、イーサンは目が覚めると、ねむれなくなりました。リラックスしようとしたのですが、不安な気持ちが消えません。もし真夜中とか、だれもいないときにほねを折ったらどうしよう？ イーサンは、そう考えると心臓がドキドキしました。こわくなって、

「お父さん！」とさげびました。  
お父さんはイーサンの部屋にかけつけました。「どうした？」  
「ぼく、こわい」とイーサンは言いました。「別のほねが折れて、だれも助けてくれる人がいなかったら、どうしよう？」  
お父さんはベッドの上でイーサンのとなりにすわると、こう言いました。「そう考えると、こわいよね。注意していても、悪いことが起こることはあるからね。でも、どんなことがあっても、天のお父様は君を見守っておられるよ。」  
「じゃあ、主はいつもぼくと一緒にいてくださるってこと？」  
イーサンは言いました。  
「そのとおり。」お父さんはイーサンをやさしくだきしめました。  
イーサンは、お父さんがどれほど早く助けに来てくれたかを考えました。お父さんが自分を愛していて、いつでも助けようとしていることは分かっていた。天のお父様もそうなのかもしれ

れません。  
翌日、イーサンは機関誌「フレンド」で、あるせいくを読みました。こんなせいくです。「おそれてはならない。主なるわたしはあなたがたとともにおり、あなたがたのかたわらに立つからである。」<sup>1</sup>  
お父さんと話したときと同じように、イーサンはこのせいくを読んで、心がおだやかになって安心しました。せいれいが自分をなぐさめてくださっていることが分かりました。まるでお父さんとまたハグしているようでした。  
きっとまたほねを折るんだろうな、とイーサンは思いましたが、おそれる必要はないんだとも思えました。自分は決してひとりではないことが分かったからです。●

\*教義と聖約 68:6



あなたが天のお父様の愛を感じたのは、どのようなときですか？

ガブリエル・シオザワ  
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)  
このお話は、アメリカ合衆国での出来事です。

イーサンはブランコの上で足をふり上げました。ブランコはどんどん高くなります。風のおかげで、まるで飛んでいるようです！  
そのとき、かねが鳴りました。イーサンはため息をつきました。休み時間が終わってしまうなんて、残念です。  
子供たちが列を作って中にもどります。イーサンはブランコのスピードを落とすと、クラスにもどるために、ブランコからおりました。  
しかし足が地面についたとき、イーサンはするどい痛みを感じ、地面にたおれこみました。立ち上がろうとしたのですが、足が